誰がではなく私たちがやろう

刈屋高志　29歳　　刈屋将志　23歳

私たちにとって栃尾は育った場所ではない。が、常に心のふるさとしてあった。栃尾にある母の実家は16代続く農家で、先祖から受け継がれてきた土地は祖父母によって守られてきた。そんな連綿とつながれてきた棚田のもつ静かな偉大さに圧倒されたのは5年前、以来誰がこの土地を次世代へとつないでいくのだろう？という疑問が頭をもたげた。そして気づいた。誰がではなく私たちがやろう、と。

現在兄弟が中心となり、家族、親戚、友人、地域の人の手を借りながら、栃尾にある休耕地を活用して無農薬野菜の生産・販売に取り組み始めている。まずは自分たちが安心して食べられる野菜づくりを基盤に、私たちが野菜を食べてほしい人、私たちの野菜を求めている人のために野菜を育てお届けしている。この地で農業が生業として軌道に乗るのは何年も先になるかもしれない。しかし、確実に踏み出したこの歩が、20年、30年‥100年先へとつながっていくことを信じて、今日も畑に立つ。

兄・刈屋高志

弟・刈屋将志

私も新しい生きがいを見つけました

刈屋　進　52歳

子どもたちが、妻の実家である栃尾で農業をやると宣言をした。「本当に大丈夫なのか」と心配するばあちゃんを除き、私たちは大賛成。彼らが栃尾にいってからは、私も栃尾に通うようになりました。雪降ろしも初めてやったし、田植えも実は今年が初めて。私も新しい生きがいを見つけたような気分です。山に来て汗を流すことがこんなに楽しいとは思いませんでした。第2の人生を歩き始めた・・・そんなテレビ番組にも出られるかもしれませんね。

II 市民協働 story II

刈屋兄弟のように都市から農村に移り住む若者が近年増えています。それは、都市での生活や仕事に限界を感じ、未来への新しい可能性を農村に見出しているのかもしれません。若者と彼らを受け入れる地域や両親・祖父母が、新しい価値観を元に協働をしています。この事例から、若者だけではなく、両親・祖父母、また地域の人たちも、自分達が暮らしてきたこの地域への誇りを取り戻していくことを見ることができます。この多世代・多地域におよぶ協働は、地域の新しい未来を切り拓いていく可能性を秘めています。

父・刈屋　進　　祖父・荒木幸男

若者と地域の未来をつなぐ【栃尾】